

特別講演 1

「日本の神経障害性疼痛に対する

薬物療法ガイドラインと今後の展望」

東京大学医学部附属病院 疼痛緩和医療部 准教授

住谷 昌彦 先生

疼痛は医療機関を受診する原因のうち最も頻度の高い症状である。生理的には、疼痛は何らかの組織障害や炎症によって末梢神経終末が興奮することによって起こり、このような生理的疼痛は生体の防御系として重要な役割を果たす（例：虫垂炎における腹痛）。一方、神経障害が原因で自発的に疼痛が起きる神経障害性疼痛（neuropathic pain）には生体の防御系としての意味合いは全く無く、患者の訴える痛みを疾患の一症状として理解するのではなく、病的疼痛そのものが治療対象としての“疾患”であると認識されなければならない。本発表では神経障害性疼痛の臨床に焦点を絞り、神経障害性疼痛の重症度を疫学調査から紐解き、神経障害性疼痛の定義、スクリーニングから診断、薬物療法について概説し、神経障害性疼痛悪循環モデルに対する治療意義について考察する。